

11	小国313
学图	

教育部
資料室

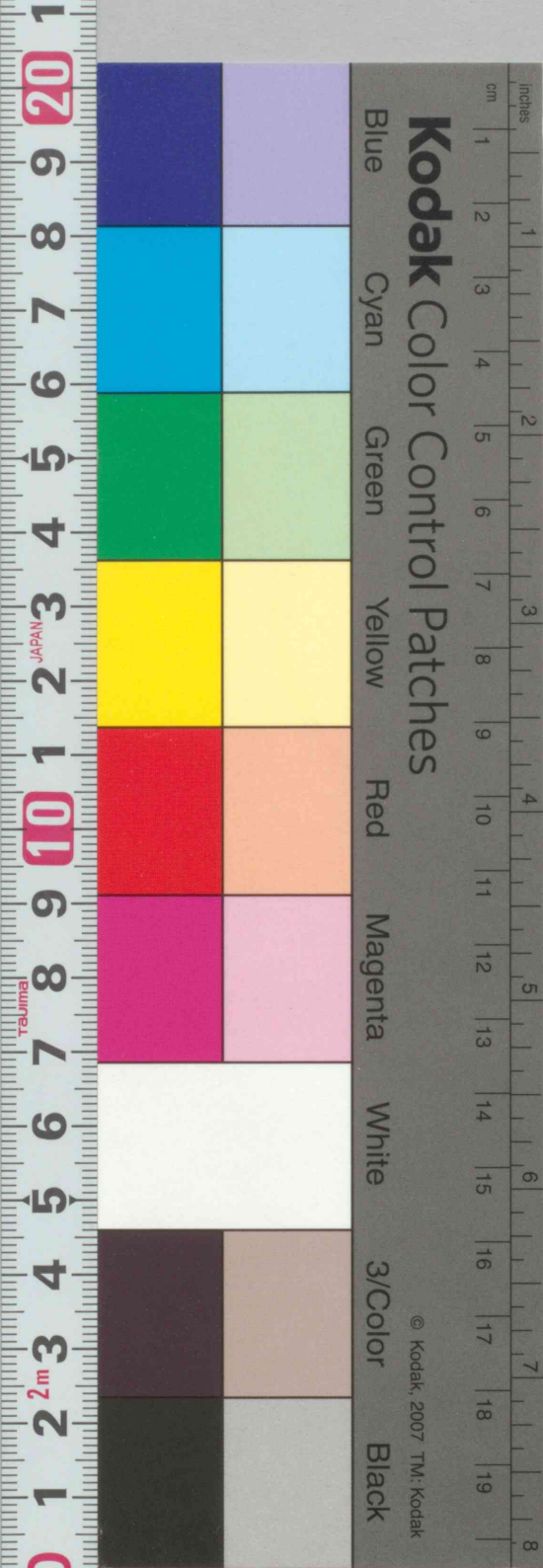
文部省検定済教科書
財団法人
日本新教育研究会編修

い
く
は
い
五



小KC
G16

学校図書株式会社発行



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60252

教科書文庫

6.
810
34-1950
01304 49809



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449809

昭和 年 月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

広島大学図書

0130449809



学 校 図 書 株 式 会 社



こ
く
ご

五

第 三 学 年 用 上

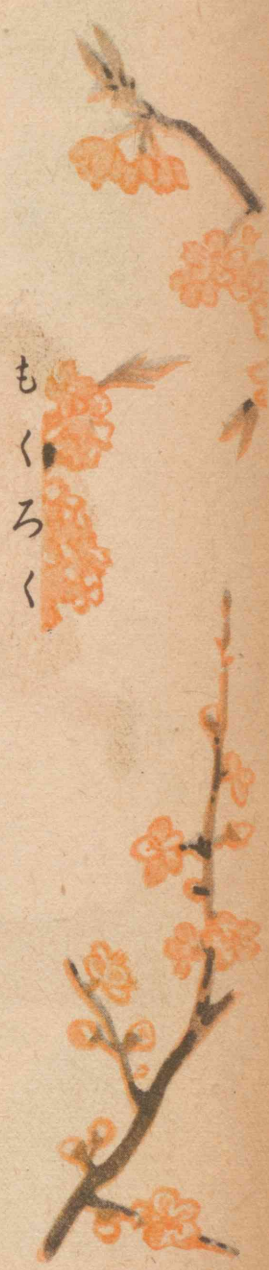
廣 島 大 学
教 育 学 部 図 書

中央図書館

広島大学図書

0130449809





もくろく

一 三年生になって

(三) しらはまへ

22

(一) あかるい教室

(四) あくる日

25

(二) 新しい友だち

三 つゆのはれま

8

(三) つぶれかけたたまご

(一) はれま

12

二 春の遠足

(二) 田うえ

36

(一) おしらせ

(三) かいこの日記

32

(二) みんなできめた

(四) はらっぱで

48

やくそく

21

四 たのしい日

六 三びきのあり

(一) はじめのことば

……先生のお話……

100

(二) わらい話

(三) ジャックとまめの木

新しく出たことば

109

(四) おうま遊び

かん字

115

五 夏休み

(一) 山の村へ

教師のページ

116

(二) としおくんの日記

88

(三) 先生への手紙

98





新しい教室の
まどをあけた。
しげるくんが
門をはいつてくる。
「ここだよーっ。」
手をふったら、
しげるくんも
手をふってかけてくる。

一 三年生になつて

(一) あかるい教室

学校じゅうのガラスが
きらきら光っている。

三年生の教室は
どこかな。

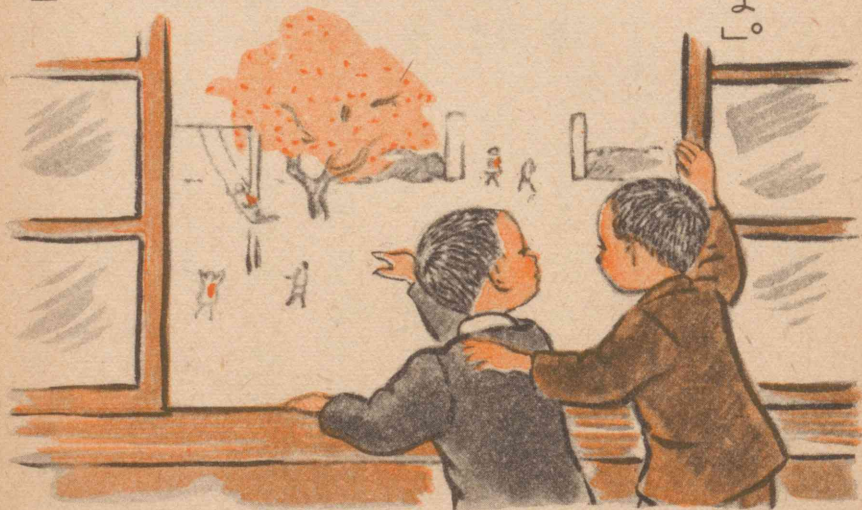
門をはいると、

ぼくは

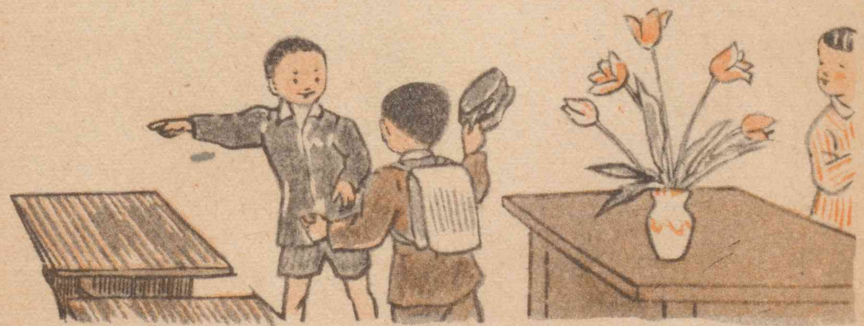
うんどう場をにかけていった。



「学級ぶんこがあるね。」
 「うん、本もたくさんはいつているよ。」
 「ほんとだ。うれしいな。」
 「早くべんきょうしたいね。」
 「まどを、みんなあけよう。」
 「あかるい教室だなあ。」
 「二かいはいいいね。」
 「あ、もう、だれかブランコに
 のっているよ。」
 「あそこのさくら、もうすぐさくね。」



○
 「としおくん、おはよう。早いね。」
 「しげるくん、おはよう。きみも早いね。」
 「この花、ぼくのうちのにわにさいたんだよ。」
 「きれいだね。先生のおつくえにかざろうよ。」
 「ぼくのつくえ、どこかしら。」
 「もつとうしろの方だよ。——ほら、ここだよ。」
 「つくえもこしかけも高いな。」
 「だって、もう三年生になったんだもの。」





(二) 新しい友だち

はじまりのかねがなりました。
しげるくんの持ってきた花が、先生のつ
くえの花びんにさしてあります。

まもなく、先生がひとりの女の子をつれて、教室にはいつ
ていらつしゃいました。はるえさんは、すぐ、新しい友だち
だと思いました。女の子は、こんど遠いところから、はるえ
さんのうちの近くへこしてきた、やす子さんです。

先生は

「このかたは、きょうからみなさんの新しいお友だちですよ。」

と、おつしゃってから、女の子の方に向きました。

「あなたのお名まえは。」

「さとうやす子。」

女の子は、はっきりした声でこたえました。先生は、黒板
に大きく「さとうやす子」と、お書きになって、

「やす子さんは、遠いところから来たのですから、ひとりぼ
つちにしないように、みなさん、なかよくしてあげてくだ
さいね。」

と、おつしゃいました。

やす子さんがおじぎをしました。みんながパチパチ手をた
たきました。先生も、にこにこしながら手をたたきました。

休み時間に、はるえさんはやす子さんをつれて、学校の中をあんないしてあげました。

「校長先生のおへやはどこ。」

「としよかんがあつていいわね。三年生もはいつていいの。」

「うさぎやにわとりは、何年生がかつているの。このとり、もうたまごを産むでしょう。」

「学級園はどこにあるの。わたし、はたけのおしごと大すきよ。」

やす子さんは、こんなふうに、なんでもどんどんきいたり、話しかけたりします。ことばが、とてもはつきりしています。



やす子さんは、前の学校の木村先生にお手紙を書きました。

木村先生、お元気でいらつしやいますか。私は、いつも近所のはるえさんと学校へいきます。

こんどのうけもちの山田先生は、おわらいになると、木村先生によくにっています。きょう、先生が、「やす子さんは、ことばがほんとにはつきりしていますね。」と、ほめてくださいました。こちらの学校には、としよかんがあります。

木村先生にお話していただいた、「ジャックとまめの木」や、「金のおの」の本もあります。学級園もありますから、たのしみです。

先生、そちらは、もうさくらが散りはじめたでしょうね。こちらは、まだ、うんどう場のさくらがさきはじめたばかりです。遠足がすんだら、またお手紙をさしあげます。

四月十日

木村先生

さよなら
さとうやす子

(三) つぶれかけたたまご

としおくんのうちのにわとりは、よくたまごを産みます。としおくんは、弟のけんちゃんも、産んだたまごのかずを書き入れるひょうを作って、台所のかべにはっておきました。

きょうは、日曜日です。

としおくんが、にわそうじをしていると、きゆうに、にわとりのさわぎたてる声がしました。

「あ、今のはレグホンだな。」

としおくんは、大急ぎでとりごやへかけていきました。

「やつぱりレグホンだ。大きいな。」

にこにこしながら、たまごを取り出そう

とした時、門の方で、

「としおくん。」

と、よぶ声がしました。あきらくんの声です。



としおくんは、たまごをうわぎのポケットにしまうと、急いで門の方へいきました。

ちょうどその時、台所の戸がガラツとあいて、けんちゃんがとりごやの方へとんでいきました。けんちゃんは、すばこをのぞいて見ました。たまごはありません。

「へんだなあ。たしかに産んだような声がしたんだがなあ。」
レグホンは、まっ白なはねに目をいっぱいあびて、はばたきました。

「やっぱり、産まなかったのかな。」

けんちゃんは、つまらなさそうにそういいながら、もう一度すばこの中をのぞきました。

夕はんのしたくができました。フライパンでやいたたまごが、さらにのっています。おかあさんが、
「きょう、もう一つ産んでくれれば、みんな
が、ちょうど一つずついたただけるのにね。」
と、おっしゃって、いちばん大きいのを、半分に分けようとなさいました。

「あ、おかあさん、きょうも産みましたよ。」

ぼく、すっかりわすれていた。」

「あら、そう。でも、いつもたまごを

おく所がありませんでしたよ。」

「なんだ、にいちちゃんが取って来たのか。」



じゃ、やっぱりあの時産んだんだな。」

「けんちゃん、ごめんね。——でも、ぼく取って来て、それからどうしたかしら。あ、そうだ。うわぎのポケットだ。」

としおくんは、あわててうわぎかけの所へとんでいきました。ポケットに手を入れると、ゆび先がつるつとしました。

「わっ、おかあさん、つぶれている。」

「まあ、そんなところへ入れておくからですよ。」

「——きつと、キャッチボールの時につぶしたんだ。——レグホンが、せっかく産んでくれたのに。」

おかあさんが、たまごをそうつとお出しになると、からがほんのすこしつぶれかけていただけでした。

「だいじょうぶよ、としおさん。ほら、大きいたまごね。」

おかあさんは、おとうさんにもお見せしました。

「なるほど大きい。つぶれなくてよかったね。これで、ちようど一つずつになった。では、これもすぐやいてもらいましょう。」

おとうさんは、にこにこしながらおっしゃいました。

まもなくおかあさんが、やいたたまごをさらにのせて、持つていらつしゃいました。

「おかあさん、それ、けんちゃんにあげてね。」

「どうして。」

「ううん、いいからけんちゃんにあげて。——けんちゃん、ご

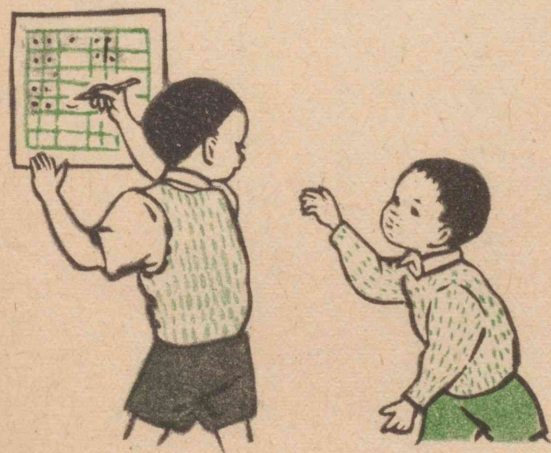
めんね。」

おかあさんは、そのさらにけんちゃんの前におきました。
ごはんがすんでから、としおくんが、
台所のひょうにしるしをつけにいくと、
けんちゃんもとんで来ました。

「きょうも、まるじるし。にいちやん、
大きく書いてね。」

「うん。」

としおくんは、大きなまるじるしを
書いて、それに、われ目のようなすじ
をちよつと書き入れました。



二 春の遠足

(一) おしらせ

「ただいま。おかあさん、こんどの金曜日遠足よ。」

「あら、よかったわね。どこへいくの。」

「しらはまよ。」

はるえさんは、遠足のおしらせをおかあさんにわたしまし
た。おかあさんは、お読みになってから、

「はるえさんも、一度いったことがあるのよ。でも、小さい
時でしたからおぼえていないでしょうね。そうそう、おと
うさんはあそこをよくごぞんじだから、こんや、お話をし

ていただくといいわ。
と、おっしゃいました。

そのばん、おとうさんは、ちずをお出しになつて、いろいろと話してくださいました。

「あそこは、きれいな貝がらがたくさんひろえるよ。」
と、おっしゃった時は、すぐにもとんでいきたくまりました。
いちばんあとで、

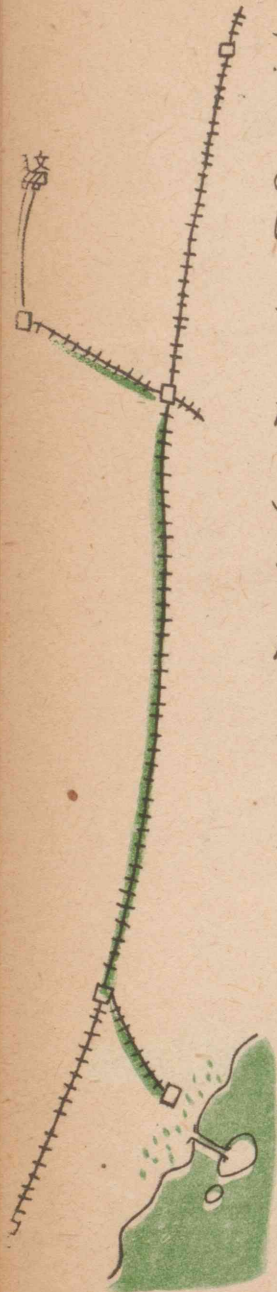
「はるえがまだ小さいころ、つれていった時は、波をこわが
つてないたのにはこまったよ。こんどはどうかかな。」
と、おっしゃって、おわらいになりました。

(二) みんなできめたやくそく

としおくんたちは、遠足のやくそくについてそうだんしま
した。

- 一 時こくを守ろうということ。
- 二 電車の中と、のりおりについて。
- 三 海でのいろいろなちゅうい。
- 四 かえってからするおしごと。

先生は、みんなできめたやくそくと、とちゅうのちずとを
すりものにしてくださいました。



(三) しらはまへ

1. 朝

くもっているぞ。

ふつたらこまるなあ。

としおくんは、リュックをせおって、

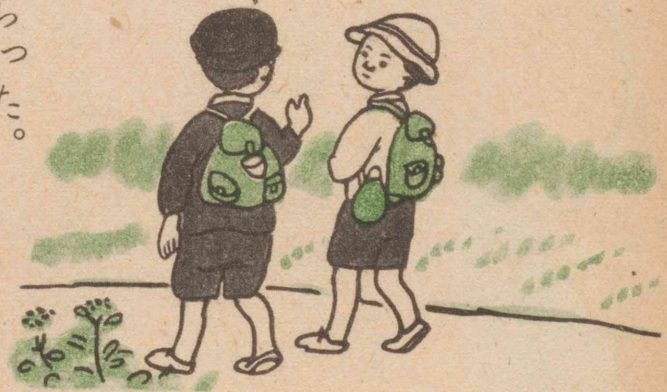
さつさとさきを歩いていく。ぼくが、

「としおくん。」

とよんだら、ふりかえつてにつこりわらった。

おいついてならんで歩く。

「まさおくん、おそくない。」



「まだ七時だよ。」

「そうかい。ぼくは、ゆうべ、うれしくてなかなかねむれなかつた。」

「ぼくも。」

すいどうの水が、コポンコポンとなっている。

2. 電車の中

どうとうふつてきた。パラパラと、雨がガラスまどにあたって、すうすうと、くものいどのようなすじをひく。いな田がぼうつとかすんで、とてもきれいだ。

3. しらはま

しらはまにいたら、雲のきれまから
太陽がじりじりてりつけていた。

としお 「波は、どうしてこんなに動くのかな。」

まさお 「風がふいているからだろ。」

としお 「でも、今、ふいていないじゃないか。」

かず子 「海は、生きているようね。」

やす子 「休みっこなしにね。」

波の向こうにゆめのように小さい島がういて見える。



(四) あくる日

きのうのことを話しあいました。

ひろしくんが、あたまから波をかぶってしまったこと、

はるえさんが、電車の中でせきをゆずってあげたこと、

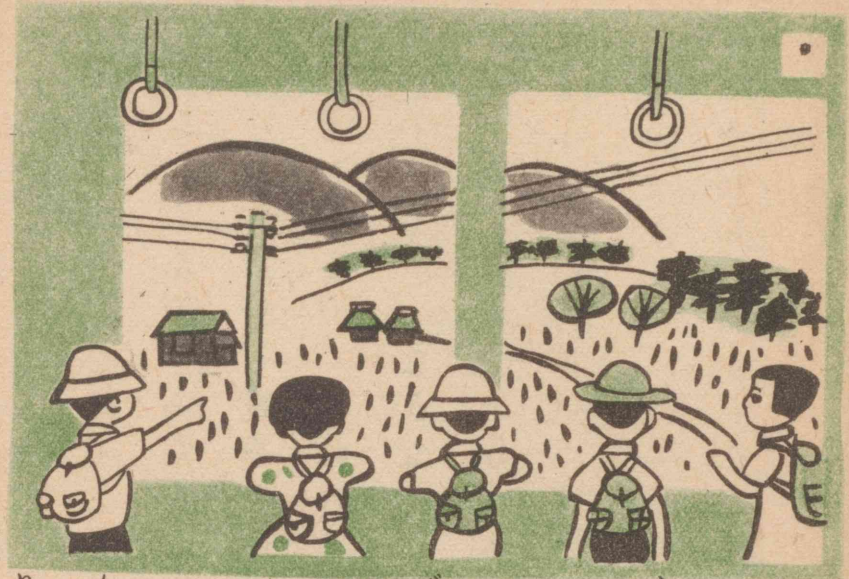
しげるくんが、いねむりをしてしまったこと、

やくそくが、なかなかよく守れたこと、

など、あとからあとからおもしろい話がつづきました。

はるえさんたちは、遠足の紙しばいを作ってほかのくみにも見せました。

ぼくたちは貝がらのひょう本をつくって学校にのこすことにしました。



みんな、にこにこしています。
 電車が、ゴトンゴトンと走りま
 す。まどの外のけしきを見ている
 と、とてもおもしろい。
 近くのでんしん柱や家が、どん
 どん後の方へとんでいきます。
 遠くの山や森は、ゆっくりゆっ
 くり動いています。
 とちゆうで、雨がふりだしてき
 たので、みんなはしんぱいでたま
 りません。

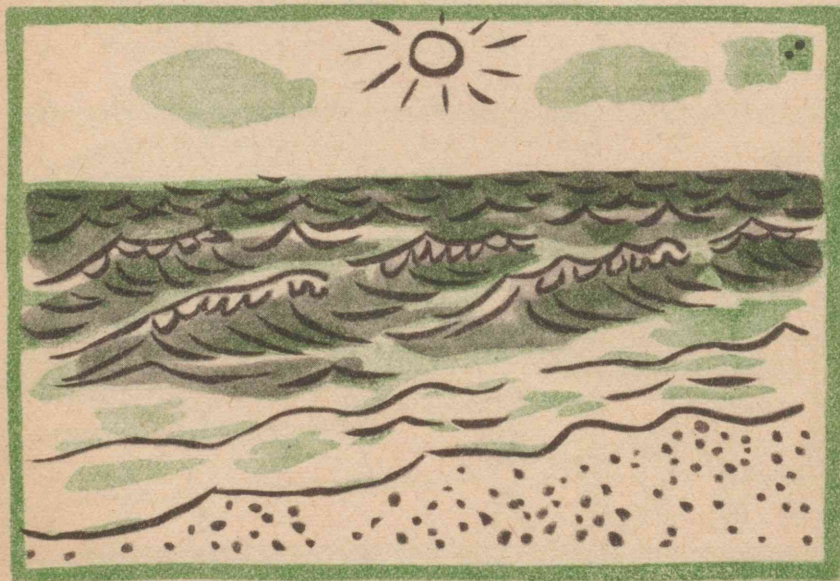
雨がやんで、あたりがぱあつ
 とあかるくなりました。

みんな、きゆうにはしやぎだ
 しました。

「海が見えた。」

と、だれかがいうと、みんなは
 われがちにガラスまどに顔をお
 しつけました。

波の音が、きこえてきます。
 ふうんと、いそのにおいがし
 てきました。





ふしぎそうに海を見ている人も
 います。貝をひろっている人もい
 ます。絵をかいている人もいます。
 ひろしくんが、
 「波はじつとしていないから、か
 けやしない。」
 と、いつています。
 あつちでもこつちでも、すな遊
 びでにぎやかです。

海は、いつでもよんでいる。
 遠いところから、よんでいる。
 ザザザ、ザザン、
 ザザザ、ザザン、

ロビンソンの島
 たから島。
 みなさんおいでと、よんでいる。
 ザザザ、ザザン、
 ザザザ、ザザン、





とても大きな波です。
波がくると、みんなが、
「わあっ」
と、いつてにげます。
波がひくと、ぬれたすなの上
をおっかけていきます。
あまりからかいすぎて、波に
さらわれたらたいへんです。

もう、帰りの時こくです。
「もつといたい、もつといたい」
と、みんながいきました。
わたしは、きれいな貝がらを、
たくさんひろいました。
みんなのをあつめて、ひょう
本をつくるのです。よぶんは妹
へのおみやげです。
くつからも、ポケットからも、
すながざらざら出てきました。
これも海のおみやげです。



三 つゆのはれま

(一) はれま

ひばり

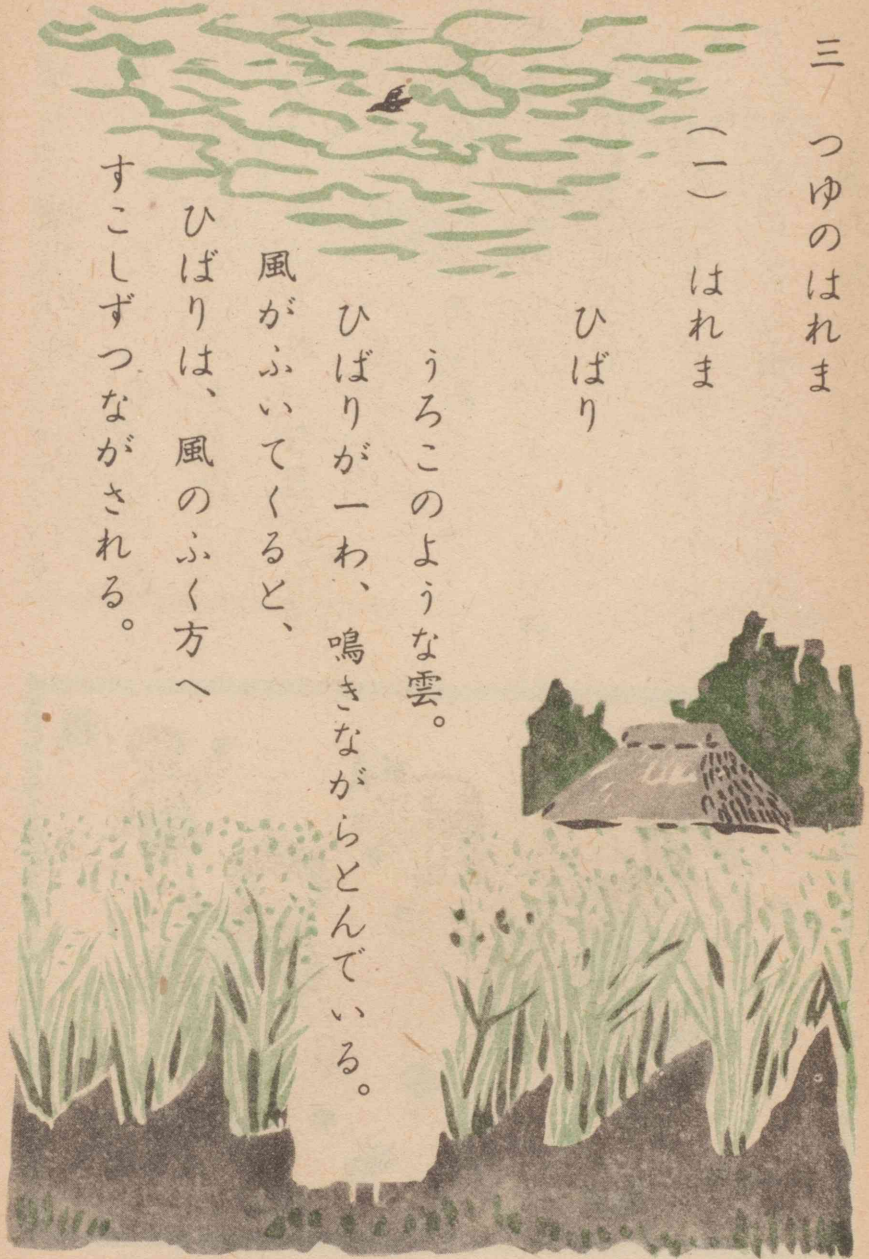
うろこのような雲。

ひばりが一わ、鳴きながらとんでいる。

風がふいてくると、

ひばりは、風のふく方へ

すこしずつながされる。



しゃも

しゃもは、わしのように

四角ばっている。

かたがはって、

むねの毛がはげている。

せいが高くて、

まつの木のように強い足。

天氣がよいので、

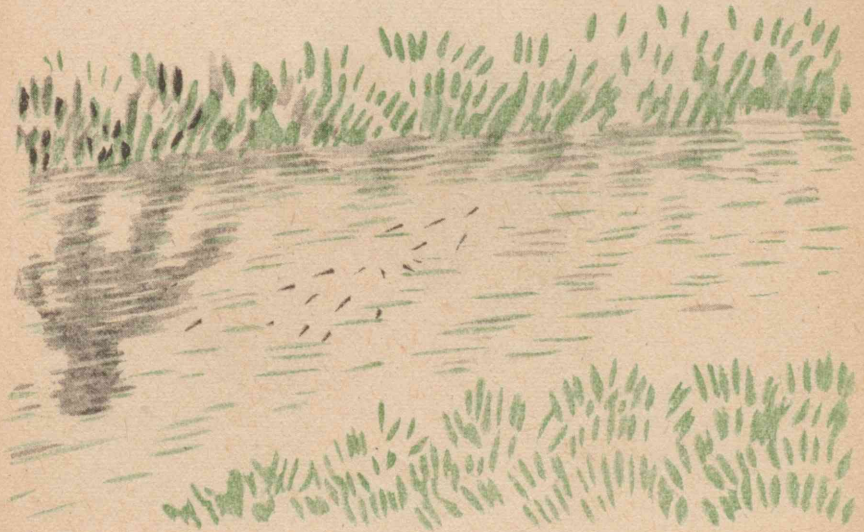
はねが、きらきら光っている。



めだか

さらさら流れる水が
すきとおって、
川ぞいが、はつきり見える。

めだかがならんで、
すうつと、川をさかのぼる。
ときどき、
小さいはらが白く光る。



かえるがとびこむ。
水のわが、
しずかにひろがっていく。

くずれたと思っためだかの列が、
また、もどおりになっ
ていく。
わたしは、
めだかについて、川をのぼる。



(二) 田うえ

まさおくんのうちでは、きょう田うえです。としおくんのうちのおじさんも、てつだいに来てくれます。

まさおくんが顔をあらっていると、おじさんのうちのいぬがとんで来ました。

「あつ、しろだ。しろ、しろ。おかあさん、しろが来ましたよ。」

「そう、それじゃあ、もうすぐおじさんがみえますよ。」

まさおくんが、顔をあらい終ると、



もう、おじさんがじてん車で走って来ました。

○

みんな、たんぼへいってしまいました。

田うえも、きょうで終りです。

まさおくんは、たんぼへおべんとうを持っていきました。

おじさんたちの見える小川のどこまでくると、しろが見つけて、いきおいよくとんで来ました。

うれしそうにしつぽをふりながら、よごれた足でとびつきます。

「しろ、だめだよ。」

まさおくんが急いで歩きだすと、しろは、また、田のあぜをどんどんかけて、おじさんたちの方へとんでいきました。



おじさんたちは、ちょうど、いちばん大きい田をうえ終ったところですよ。

おじさんもおとうさんもおかあさんも、みんな田からあがりました。手も足もどろだらけですよ。

「もう あと二まいか。おかげで、きょうは早く終りそうだよ。」

「いや、なれないのでね。」

「ほんとに、おじさんに来てもらってたすかりますよ。——

さ、ちょうどどきどきが、いいから、少し早いけれど、おひるにしてください。」

おじさんたちがおひるをたべている間、まさおくんは、そばでまつの木にのぼって遊びました。

あつちこつちで、田うえをしています。

しろが、小川のどてをかけたまわっています。

「おじさん、おじさんのうちのやねが見えますよ。——としおくん、何をしていますかな。」

あ、汽車がくる。——十一時半の上りだよ。」





夕はんの時、おじさんと、おとうさんは、にぎやかに話していました。

「おとうさん、きょうで、もうすっかりすんだの。」

「うん。おかげでね。だが、これからがたいへんなんだよ。」

おじさんがお帰りになる時、おかあさんが、おすしのふろしきづつみをあげると、

「これはどうも。としおが、きつと大よろこびでしょう。」

とおっしゃって、じてん車の後に、しっかりゆわえつけました。

「おじさん、さようなら。しろ、またこいよ。」

まさおくんが戸口で見送っていると、おじさんは、なんどもふりかえりました。

かえるの音が、すずしい風にのってきこえてきました。



(三) かいこの日記

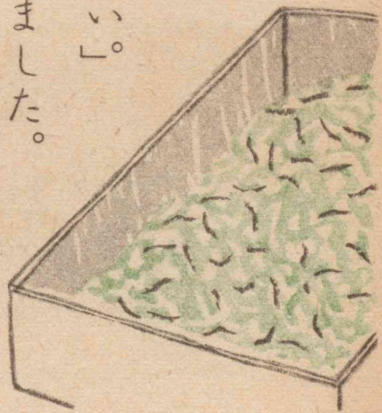
五月十三日

「かいこがかえったから見にいらっしやい。
ど、となりのよし子さんがよぶのでいきました。」

はこの中に、黒い毛虫がおりのようにうようよしていま
した。おばさんは、小さくきざんだくわの葉をふりかけながら、
「もつと大きくなったらあげますよ。」
と、にこにこしていらっしやいました。

五月十五日

もう七ミリぐらいの大きさです。はい色をした、頭でつか



ちの、かわいらしい虫になっています。せっせとくわの葉を
たべます。

五月十七日

どれも頭をもち上げたままじっとしています。ねむってい
るので、一・二日するとまたくわをたべはじめなのだそう
です。ねむるたびに、古い皮をぬいで、むくむく大きくなると
いうから、気をつけてみます。

五月二十三日

おりのあきばこをもつていきました。おばさんは二度目の
ねむりからおきたばかりのかいこを、七ひきくださいました。
二センチぐらいで、青白いきれいな色をしていました。

五月二十六日

はこれのおそうじをしようとしたら、どうしたのか、二ひきだけひどくよわったのがいました。にいさんに、

「ぬれた葉をやったんじゃないかな。すてたほうがいいよ。」と、いわれました。

六月四日

四かい目のねむりからおきました。一ぴきだけ、からだをしきりに動かして、よごれた古い皮からぬけ出ようとしています。しつぽにぬけがらのついたままのものもいます。

「まあ、まあ。すばらしいおかいこさんですこと。よし子のもこんなものです。もうだいじょうぶ。」

と、見ていただいたおばさんにほめられました。

「おかげさまで。」

と、そばにいたおかあさんは、おれいをいいました。

くわもとうから、大きな葉のままやるのでとてもらくです。

六月九日

くわの葉をガツガツたべる音がきこえます。四・五日おきぐらいにねむったのが、こんどはねむりません。大きさはハセンチぐらいです。

六月十二日

一ぴきが口からいを出しています。わらで、まぶしをこしらえてやりました。まぶしの中に入れると、あちらこちら、

すを作るところをさがしています。からだがすきとおるよう
に見えます。もう、くわの葉はたべません。

六月十三日

けさ見ると、白いいとでまゆを作り

かけています。ぼくは、にいさんに、

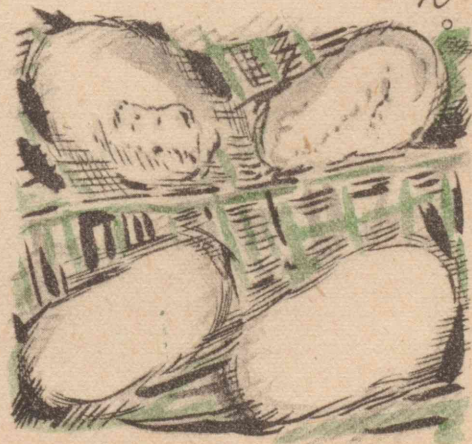
「まゆを作りはじめたよ。」

と、大きな声でいいました。

あと三びきも、さかんにいどを出しています。これもまぶ
しにうつしてやりました。

六月十四日

四ひきとも、きょうそうするようになまゆを作っています。



いちばんはじめのは、もうかいこが見えなくなりました。

六月十五日

にいさんがまゆを取りました。とてもかたいです。ふって、
みるとゴトゴト音がします。目がまわるだろうと思って、や
めました。

六月十六日

また、三つまゆができました。あとにのこったかいこも、
いどを出しはじめました。これで、ぜんぶあがりました。

六月十八日

いちばんあとののは、とても大きなまゆになりました。ぼく
は五つのまゆを、よし子さんに見せにいきました。

(四) はらっぱで

きょうは、ひさしぶりにからりと
晴れた天気です。

としおくんたちは、近くのはらっ
ぱで野球をしました。

「アンパイヤは、やっぱりとしおくん
がいいね。」

「それじゃ、ぼく、うてないからつまらないな。」

「でも、アンパイヤは、きみがいちばんうまいんだもの。」

「じゃ、あとでしげるくん、かわっておくれよ。」



どうとう、としおくんがアンパイヤになりました。

ピッチャーはしげるくん、バッターはあきらくんです。

「プレーボール。」

しげるくんのたまがはやいので、としおくん
は、いっしょうけんめいです。

はじめのたまは、ものすごくはやいたま。

としおくんは、思わず顔をよける

ようにしました。

「ボール。」

としおくんは、大きな声でいいま

した。けれども、すぐ、今のはストライク



だっただかもしれないと思つて、むねがどきつとしました。

しげるくんは、ちよつとぎんねんそうな顔をして、こつちを見ましたが、すぐ、つぎのたまをなげる用意をしました。

としおくんは、また、たまの来る方をじつと見つめました。

こんどのたまもはやいたまです。でも、ほんの少しはずれました。ほんの少しでも、としおくんはたしかにボールだと思ひました。

「ボール」

大きな声で、はつきりいしました。

しげるくんを見ると、しげるくんも、「そうだよ」と、いふような顔をしていました。

としおくんは、なんだかい気もちがして、つぎのたまをまた、じつと見つめました。



あきらくんのうったたまがそれで、よしえさんの家のにわへとびこんでしまいました。

あきらくんととしおくんが、たまのとんでいった方へかけていきました。

かきねのそばで、としおくんが、

「よしえさあん」

と、よんでみました。でもへんじがありません。





たまは、ちようど、
よしえさんが、まま
ごとをしていたとこ
ろへとびこんだので
した。

としおくんは、かきねについた木戸をコト
ンど、あけました。
にわに大きなつつじの木があります。
こいもいろいろの花が、いっぱいさいていま
す。



つつじの向こうから、よしえ
さんの声がしてきました。

「まあまあ、どこの子のまりで
しょう。ぼうやのごちそうが
めちやめちやね。おお、よし
よし、なくんじゃありませんよ。
いい子、いい子。」

「やあ、ままごとをしているな。
よしえさんがにわにいて、ちようど
よかつたな。——うふふ、よしえさん
のおばさんにそっくりな声を出しているな。——ようし、じ



や、ぼくも、おばさんにいうような声でやってみよう。」

「ごめんください。」

よしえさんが、つつじのかけから顔を出しました。

「ぼく、としおです。すみませんがたまをどらせてください。」

よしえさんは、ちよつと、びつくりしたようでしたが、すぐいいました。

「ああ、あなたのですか。さあ、おかえしいたしましょう。」

こんどから気をつけてくださいいね。ぼうやのごちそうが、だいなしですからね。」

「ぶつ、よしえさん、やっぱりじょうずだなあ。おばさんそ

つくりだ。」

「あら、としおさん、わらっちゃ

だめじゃないの。」

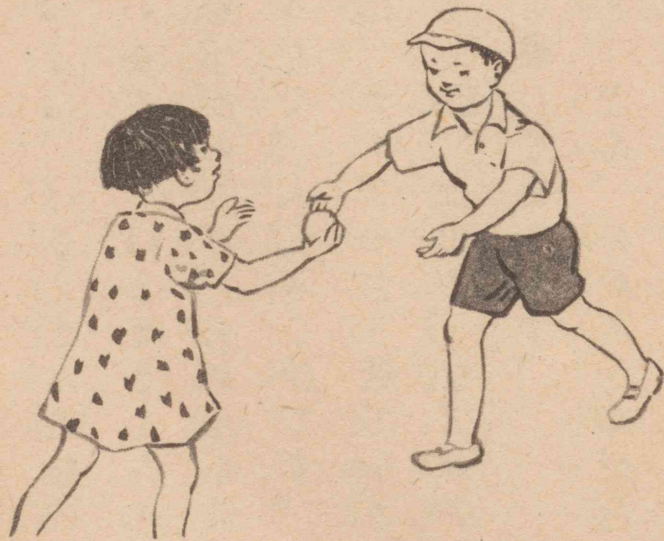
「ごめん、ごめん。——どうもあり

がとうございました。——さようなら。」

木戸の方で、あきらくんのわら

う声がありました。としおくんは、

たまをもらって、あきらくんの方へかけていきました。



四 たのしい日

学びい会プログラム

- 一、はじめのことば はるえ
- 二、かみしばい やしげす子
- 三、わらい話 ひろし
- 四、かげえ ジャックと
まめの木 ほか三名
- 五、うた みんな
- 六、げき としお
- 七、お話 ほか七名
- 八、おわりのことば 先生

きょうは、はるえさんの組の学びい会です。はるえさんたちは、絵をかいたり、おめんを作ったりして、大よろこびです。教室は、テープやおり紙でかざられました。上のようなプログラムも書いてあります。おとうさん、おかあさんがたも、おまねきしました。

(一) はじめのことば

このあいだ、三年生になったと思つたら、もうふた月いじようもたちました。

きょうは、わたしたちの組の学びい会をいたします。やることも、プログラムも、わたしたちがそうだんして、きめました。お話、うた、げきなど、いろいろあります。おとうさん、おかあさんがたも、おおぜい見に来てくださいます。ありがとうございます。

わたしたちも、いっしょうけんめいにいたしますから、どうぞ、よくごらんください。

(二) わらい話

○ ○

たろう「もういいかい。」

じろう「まあだだよ。」

たろう「もういいかい。」

じろう「まあだだよ。だって、おしいれの戸が、なかなかあか

ないんだもの。」

◇ ◇

子ども「ゆうびんやおじさん、どこに行くの。」

ゆうびん「あの山の向こうのおうちへ、手紙をとどけに行くん

だよ。」

子ども「それなら、おじさん、わざわざいなくても、このポ
ストに入ればいいのに。」

◇ ◇

ゆき子「おかあさん。わたしね、きょうから、お小づかいをむ
やみにつかわないで、ちよ金することにしたの。」

おかあさん「まあ、それはかんしんですね。」

ゆき子「ですから、ごほうびに、チョコレートをかってくださ
いね。」

◇ ◇

あるばん、ひとりの男がにわへ出て、長いさおをふりまわ

していました。そこへ三人の友だちが来て、

「きみ、何をしているのだね。」

と、ききました。その男は

「あのきれいな星を二つ

三つ取りたいと思つて。」

と、答えますと、三人の友

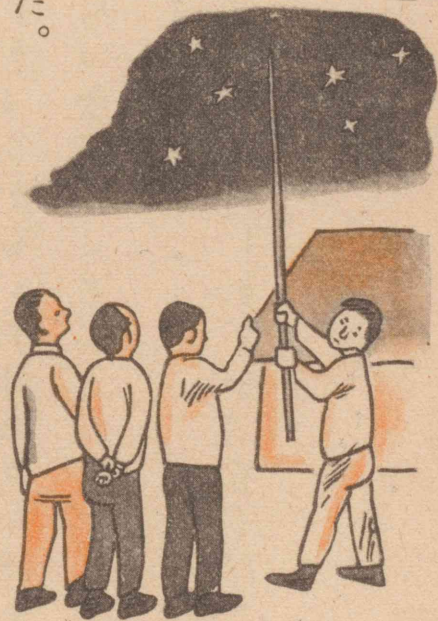
だちは、つぎつぎにいきました。

「そこからはとどかないだろう。」

やねへ上がつてやりたまえ。」

「あの星がとれるものか。あれは雨のふるあなたなもの。」

「こんなくらいばんにやらないで、ひるやつたほうがいいよ。」



(三) ジャックとまめの木 (かげえ)

(ことば) あるところに、ジャックという子どもがおりました。ジャックは、おかあさんとふたりで、なかよくくらししていました。けれども、ジャックのおうちは、だんだんびんぼうになっていきました。家のどうぐもきものも、すっかり売りはらつてしまい、今では、一ぴきのうしがのこつてゐるだけになりました。

ジャックがまだ小さいとき、ジャックのおうちには、こうふくの鳥がいました。そのころは、ジャックのおうちは、たいへんこうふくにくらししてゐました。けれども、あるとき、

わるい大男のために、こうふくの鳥をとられてしまいました。それからは、どういうものか、うんがわるく、だんだんびんぼうになってしまったのです。

ある日、おかあさんは、ジャックをよんでいいました。

「ジャックや、うちもこんなにびんぼうになってしまった。かわいそうだけれど、おまえ、町へ行って、あのうしを売ってきておくれ。」

ジャックもうしを売るのはいやでしたが、しかたがありません。うしをつれて、町へでかけました。すると、とちゅうで、ひとりのおじさんにあいました。

「おまえさん、どこへいくんだい。」

「町へうしを売りにいくのです。」

「そうかい。おじさんは、ここにめずらしいまめを持っていくんだがね。このまめとうしとを、とりかえっこしようじゃないか。」

おじさんは、こういつてまめのふくろを見せました。ジャックはめずらしいまめと聞いたので、うしととりかえっこして家に帰りました。

ジャックの話聞いたおかあさんは、あきれてしまいました。た。

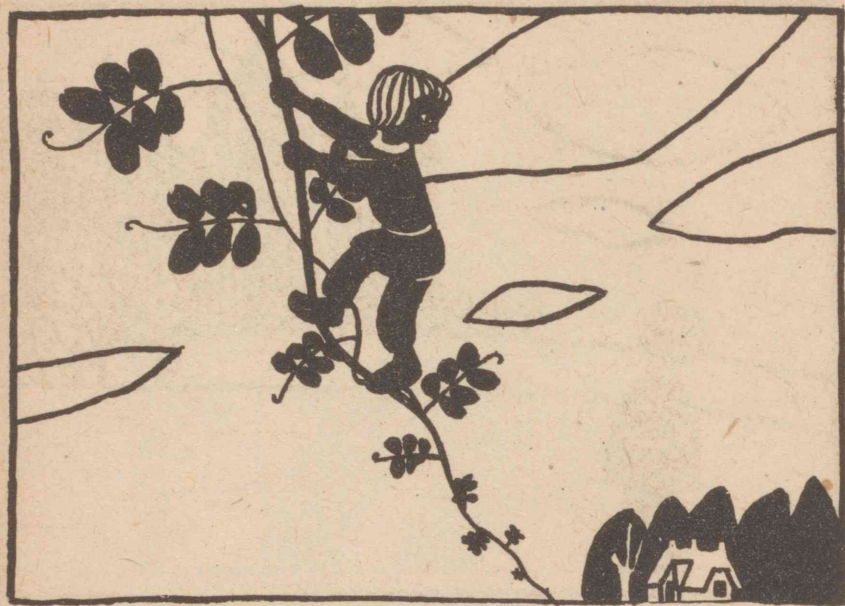
「まあまあ、おまえは、とんだことをしてしまったねえ。こんなつまらないまめと、だいじなうしととりかえるなんて。」

と行って、まめを、おにわへばらばらとなげすててしまいました。

つぎの朝、目をさましたジャックが、ふと外を見ると、へんなものが見えます。なんだろうと思つて、出て見ると、大きな大きなまめのくきが、はしごのようにからみあつて、その先は、高い高い雲の上までものびています。きのうすてたまめが、たったひとばんのうちに、こんなに大きなまめの木になったのです。

ジャックは、見上げながら、

「このまめの木をのぼつていったら、どこへいけるだろう。」と考えました。そして、まめの木をのぼりはじめました。



「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

ジャックは、どんだんのぼりづけます。

まだ、なかなかだな。ちよつとひと休みしよう。あ、おうちがあんなに小さくなつてしまった。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

くものところもすぎました。



ジャックは、ごてんに近づいて、まどから、そつとのぞいてみました。

「あつ、大男だ。」

大男は、いすにすわって、ぐうぐうねています。大男の前の鳥かごには、一わのうつくしい鳥がいます。

「そうだ。あれが、ぼくの家からとつていった、こうぶくの鳥にちがいない。」



「ああ、やつとついたぞ。」

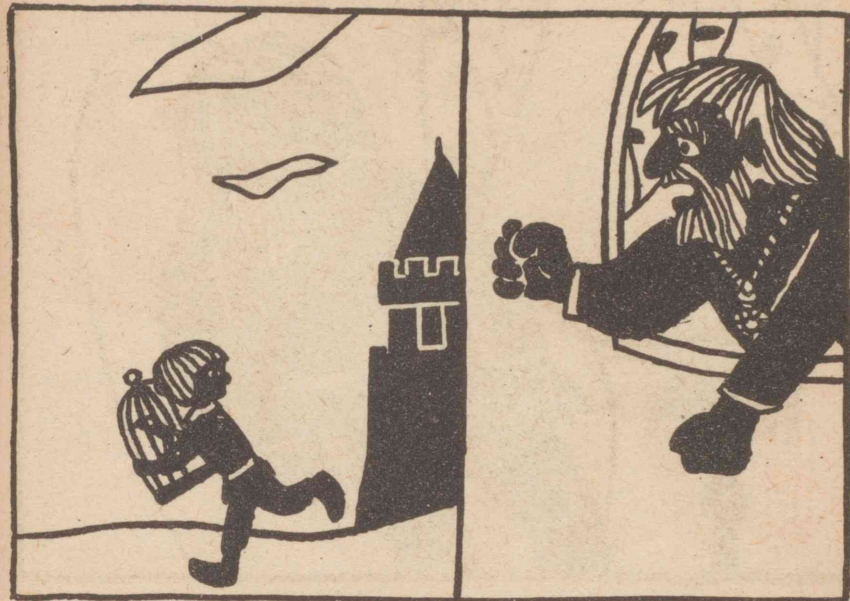
「ここはどこだろう。あつ、りっぱなごてんだなあ、いってみよう。」

ジャックは、そのごてんの方へ歩いていきました。

「見れば見るほど、うつくしいごてんだ。いったい、だれがすんでいるのかしら。空の王さまのごてんかもしれない。」



「おかあさん、早く、早く、おのをもつてきて。」
 おかあさんは、急いでおのをもつてきました。ジャックはおりが早いか、おのでまめの木のねもとを切りました。
 「えいっ、えいっ。」
 「あーっ。」
 わるい大男は、まっさかさまにおちてしまいました。



ジャックは、まどから、そうつとはいりました。こうふくの鳥をつかまえると、また、まどからとび出しました。
 大男は目をさしました。
 「やっ、たいへんだ。」
 と、いって追いかけてきました。
 「こらっ、こぞう、まてーっ。」
 ジャックは、まめの木をつたわって、どんだんにげました。
 「おい、まてーっ。」

(四) おうま遊び (げき)

人

たろう 学ぼうをかぶる

まさる 白いうんどうぼうをかぶる

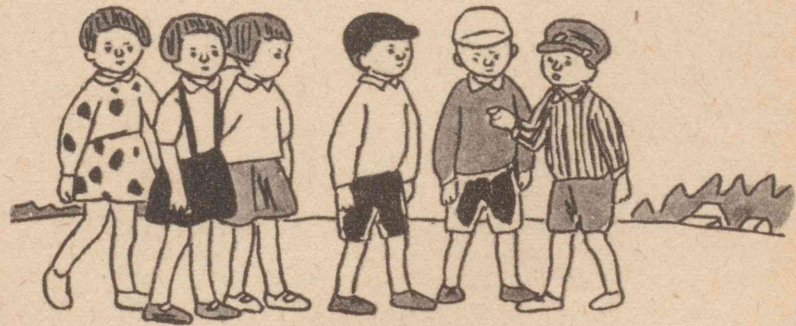
しろう 赤いうんどうぼうをかぶる

ちよ子・はま子など 女の子

五・六人

ところ

ひなたのはらっぱ



たろう 「ね、おうま遊びしないか。」

まさる 「うん、しよう。」

たろう 「じゃんけんで一ばん勝ったものが、うまにのるんだよ。」

まさる 「二ばん目に勝ったものが、うまの頭になって。」

しろう 「一ばんまけたものが、うまのどうたいになるんだね。」

まさる 「勝ちたいなあ。」

しろう 「勝って、おうまにのりたいなあ。」

たろう 「さ、じゃんけんだ。」

三人はじゃんけんをする。一ばんにたろう勝つ。

まさる 「やあ、たろうくんが勝った。たろうくんいいなあ。お

うまにのれて、いいなあ。」

おうまにのってなにをみた

おうまはいはい はいどうどう。
 おうまにのって 何を見た。
 朝日に光る 銀のふじ。
 ふじさんきれいだ はいどうどう。
 たらうはうまからおりる。
 しろう「たらうくん、どうだった。」
 たらう「いい気もちだったよ。」
 まさる「じゃ、またやろう。」
 三人じゃんけん。まさる勝ち。しろうは頭、たら
 うはどうたい。
 まさる「うれしいな。さ、ぼくのるよ。」
 まさるは、たらうとしろうのうまにのって、うた
 いながら、あたりを歩きまわる。

あさひにひーかるぎんのふじ

ふじさんきれいだはいどうどう

しろう「さ、まさるくん、おうまになる、じ
 ゃんけんた。」
 まさる「よし、まけたりなんかしないぞ。」
 しろう「ぼくだってさ。」
 まさるとしろうは、じゃんけんをする。しろうがまける。
 たらう「やあ、しろうくんのまけた。しろう
 くんがうまのどうたいになるんだよ。」
 まさる「たらうくんはおもいよ。」
 しろう「へいきだ。」
 そこで、たらうは、まさるとしろうが作っ
 たうまにのり、う
 たをうたいながら、あたりを歩きまわる。

おうまあそび

辻とね子 作曲



おうまはいはい はいどうどう。
 おうまにのつて どこへいこ。
 おどぎのくには 花ざかり。
 花見にいこう はいどうどう。
 まさは、うまからおりる。
 しろ「まさるくん、どうだった。」
 まさる「いい気もちだったよ。」
 しろ「ぼく勝ちたいなあ。さあ、
 やろう。」
 ところへ、ちよ子、はま子たちがやってくる。
 ちよ子「何をしているの。」



たろう「おうまあそびさ。おもしろいよ。」

しろ「ぼく、まだ一度ものらないのさ。でも、こんどは勝つ

から、見ていてね。」

まさる「さあ、じゃんけん。」

こんどは、たろうの勝ち。まさるが頭、しろはどうたい。

ちよ子「あら、しろうさん。まけたじゃないの。」

しろ「またまけちゃった。つまらないなあ。」

たろうは、うまにのる。ちよ子とはま子は、いっしょにうたう。

おうまはいはい はいどうどう。

おうまにのつて 何しよう。

アフリカたんけん いさましい。

もうじゅうがりだ はいどうぞう。

たろう、うまからおりる。

まさる「たろうくん、どうだった。」

たろう「いい気もちだったよ。」

ちよ子「ね、わたしたちもはいつて、何か、ちがった遊びをし
ましようよ。」

しろう「まつてよ。ちよ子さん。ぼくがいつぺんのつてからに
してよ。さ、たろうくん、もう一度やろう。」

はま子は、しろうをわきの方へつれていつて、何か話す。

はま子「ね、これなら、きつと勝つわ。」

しろう「そりかなあ。」

すると、また、しろうがまける。たろうが頭、しろうはどうたい。まさるが
のることになる。

はま子「ごめんなさい。いしなら、きつと勝つと思つたのよ。」

たろう「しろうくん、かわいそうだなあ。ぼく代わつてあげよ
うか。」

しろう「いいんだよ。ぼく、まけたんだもの。」

まさる「ぼく、のつてもいいのかい。」

しろう「いいよ。さあ、早くのれよ。」

まさるは、うまにのる。みんなは、うたう。

おうまはいはい はいどうぞう。

少しつかれた かわいいそう。

まぐさをやるうか 水やるか。

ちよつとお休み はいどうぞう。

まさる、うまからおりる。

ちよ子「ね、おうま遊びよして、かくれんぼう遊びをしましよ
うよ。」

しろう「いやだよ。ぼく、勝つまでやるんだ。」

はま子「またまけたら、どうするの。」

しろう「こんどは勝つさ。」

ちよ子「わたしが、じゃんけんしてあげましようか。」

しろう「だいじょうぶよ。さあ、やるう。」

こんどもまた、しろうがまける。まさるが頭、しろうはどうたい、たろうが
のることになる。

たろう「しろうくん、ぼく、のるのいやだよ。きみのるといい
よ。」

しろう「いいんだよ。きまりは、きまりどおりにしなくっちゃ
いけないよ。」

はま子「きのどくねえ。」

たろうはのる。みんなでうたう。しろうは少しつかれる。

おうまはいはい はいどうぞう

かわいいおうまよ つかれたろう。

そろそろお歩き つまづくよ。

ころんじゃいけない はいどうどう。

たろう、うまからおりる。

たろう「もう、よそうよ。」

ちよ子「たろうさんが、おうまになって、しろうさんをのせて

あげたらいいわ。」

しろう「いやだよ、そんなの。」

はま子「そんなら、もう、よしましようよ。」

しろう「いやだよ。いやだよ。」

ちよ子「またまけたら、どうするの。」

しろう「ぼく、勝って、のつてみたいなあ。さ、もう一度。」

まさる「こんどで、おしまいにしようね。」

しろう「うんいいよ。」

ちよ子「しろうさん、勝ってね。」

はま子「しろうさん、しっかり、しっかり。」

しろうの勝ち。みんなは、わっといつて、手をたたいてよろこぶ。まさる

が頭、たろうがどうたい。

ちよ子「しろうさん、うれしいでしょう。」

しろう「うん。」

たろう「さ、しろうくん、のれよ。」

まさる「元気にびよんびよんはねてあげるよ。」

ちよ子「わたしたちもついていくわ。ねえ、はま子さん。」

はま子「ええ、手をたたいてあげるわ。」

る

しろうは、うれしそうにうまにのる。たろうのうまの元気のよいこと。ぴよんぴよん、はねたり、おどったり。ちよ子やま子たちも、手をたたき、うたいながらついてまわる。

おうまはいはい はいどうどう。

おうま元気だ かぼかぼかぼ。

のりても元気だ うれしそう。

はねろ おどれよ はいどうどう。

おうまは、うれしそうにしろうをのせて、向こうのはらっぱの方へいってしまふ。

○ここに出てくるのは、それぞれどんな気もちの子どもでしょうが。

——まく——



五 夏休み

(一) 山の村へ

としおくんが、こんなに長い間
汽車にのつたのは、生まれてはじ
めてです。まどの外のけしきを、
いつまでもいつまでも、あきない
で見えています。おかあさんといっ
しよに、おじいさんのうちにい
くところなのです。村の小さな駅に
ついたのは、昼すぎでした。



駅から、また八キロメートルも歩かなければなりません。
あせがほおから、たらたらと流れます。

きれいなしみずの出るそばで、休んでいると、ガタゴト、
ガタゴトと、からの馬車が通りかかりました。おかあさんの
知っているおじいさんだったので、のせてくださいました。

村が近づいたのでしよう。おかあさんは、あう人ごとに、
何かあいさつをかわしていらっしやいます。よくわからない
ことばもあります。

「ぼっちゃんですか。よくにいますこと。」
と、いうようなこともいつているらしいです。

馬車とわかれてから、また二キロメートルほど、山にはい

るのです。やっと、リヤカーの通れるくらいのも、せまい山道にかかりました。せみが、うるさいほど鳴いています。

道のすぐそばを、谷川が流れています。そこで、手ぬぐいをしばって、あせをふきました。どこからともなく、すずしい風がふいてきて、いい気もちになりました。どばしをわたると、目の前にわらぶきの家が七八けん見えました。よくもまあ、こんな山のおくに人が住んでいるものだなあと思われました。

右がわの家から、小さな黒いぬが出て来て、さかんにほえていきます。あまりはげしいので、その家から、おじいさんが出て来ました。としおくんたちの方を見て、

「まあまあ、おまえたちかい。よく来たねえ。」

と、近よってきました。そこがおじいさんの家だったので、おばあさん、おじさん、おばさん、一ろうさん、じろうくん、たみ子さん、みんなよろこんでむかえてくれました。

すずしい大きな家です。夜はおいしいうどんをごちそうになりました。えんがわに出て、いろいろお話をしました。昼みどりに見えた向こうの山は、青い夜空に黒く立っています。その上には、星がうつくしく光っていました。谷川の音が昼よりも、はっきりとひびいて来ます。

かやもつらないでねむれるほど、すずしい山の夜でした。

(二) としおくんの日記

八月十日 晴

朝、目をさました時には、もうおじさんたちは、山へ草かりに出かけていました。

おかあさんは、お台所のおてつだいをしています。じろくんとたみ子さんは、にわとりやうさぎに、えさをやっています。

前の流れで、顔をあらっていると、向こうの山から、

カッコウ カッコウ

という、すんだ鳥の音がきこえてきました。

じろくくんといっしょに、草をかつている所へいってみました。ぞうりが、朝つゆで、ぐっしよりぬれてしまいました。

どのかごにも、もういっぱい草がはいっています。

一ろくさんが

「たべてごらん。」

といって、山ぶどうをくれました。すっぱいあじがして、口の中がすうつとしました。

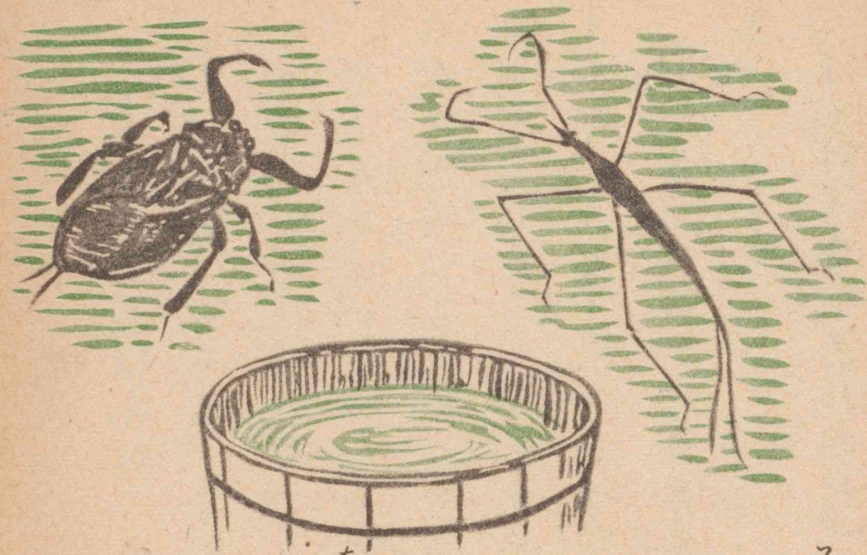


八月十一日 晴

じろくんとうらの小川へいきました。じろくんはあみ、ぼくはあきびんを持っていきました。そうして、えびや虫をすくつてきました。たらいに入れて、見てみると、とてもおもしろいです。たみ子さんも、よろこんで見っていました。

みずすまし

ちよつとさわると、せんこう花火に火をつけたように、まわりだす。こんなにまわって、よく目がまわらないものだ。どうして、こんなに早く水の上を走れるのだらう。こんなに走れたら、ゆかいだらうな。



みずかまきり

細い木のえだのようだ。何もたべずにいるのかと思われるほど、やせている。でも、やはり、かくれていて、ほかの虫にとびつくのかもしれない。

たがめ

木の葉、かれた木の葉。色も形もなまえも、なんだかおそろしい。大きなかまを持っている。水の中
のあばれものなんだな。

八月十二日 晴

じろくんとはくはくろをつれて、うらの小山へのぼりま
した。山道は細くて、まがっています。草のにおいがします。
からだじゅうあせびつしよりになりました。

とうとう、いちばん上につきました。大きなまつの木が、
二本立っていました。向こうには、もっと高い山がいくつも
ならんでいます。どこを見ても、みどりです。ふいて来る風
までが、みどり色のように思われました。

村はすぐ目の下に見えました。小川が細く長くつづいて、
光っています。

「ぼくのうち、あれだね」

「だれか、歩いているよ、あの道」

「たんぼの中にも、人がいるよ」

「なんでも、小さく見えるね」

けしきに見とれていると、うしろの方で、きゆうにガサガ
サと音がしました。びつくりしてふり向くと、やぶの中から、
くろがどび出して来ました。

じろくんは村の方に向かって、

「おーい」

と、大声でよびました。ぼくもよんでみたくなりました。

「おーい」 「おーい」

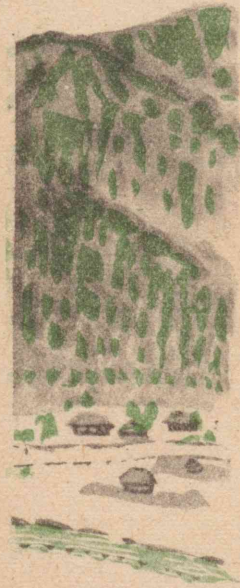
おかあさんにきこえたかしらと思いました。

八月十三日 雨

きょうは、朝から雨がふっています。じろくんとふたりで、本を読みました。ざっしの中から、すきな詩をえらんで大きな声で読みました。

知らない国

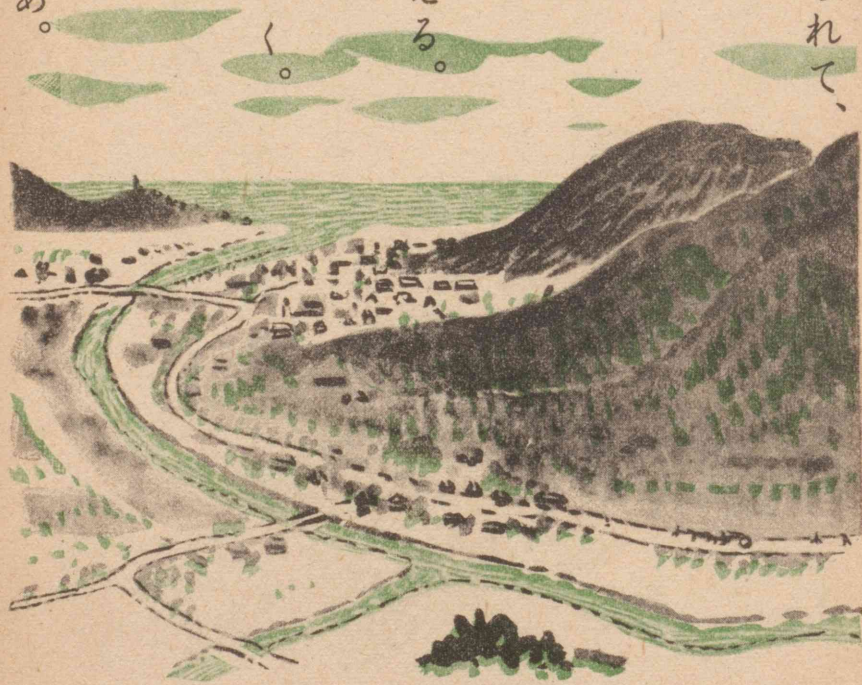
小さいぼくでなけりや、
だれも、このさくらの木へのぼれないだろう。
ぼくは両手で木をだいて、
知らない国をながめた。



おとなりのにわが花でかざられて、
ぼくの目の前にある。

それから、見たこともない、
いいところがたくさんある。
川がさざなみをたてて流れ、
青い空がかがみのように見える。
ほこりの道がつづいて、
人がみんな町の方へ歩いていく。

もつと高い木があれば、
もつと遠くが見えるのになあ。



川がだんだん大きくなって、
海のふねの間に流れこむところ。
また、両方の道がどう話の国へつづいて、
そこで、子どもたちが五時にごはんをたべ、
おもちゃが、生きて動いているところも
見えるのになあ。

草にねて

雲はずんずんとんでいく。

雲は大きい白い鳥。

ぼくはねている 草の上。



あれち野ぎくの花の中。


雲のつばさはあかるくて、
まるで光がふるようだ。
白いつばさのあの下の、
ちようどあの下あの下あたり。

今はどこだろ どの町、
ぼくの知らない野っ原か。
雲はほんとにいいんだな。
いつもどこへもとんでいく。

ぼくの知らない どこかにも、
ぼくにいた子もいるだらな。

(三) 先生への手紙

先生



お元気ですか。ぼくは山の中のおじさんの家に来ています。いとこのじろうくんと、すぐなかよしになりました。ふたりで、うらの山へのぼりました。のぼりはたいへんつかれましたが、上のけしきはうつくしくて、えのようでした。草かりもしました。かまでは切りませんでした。草であちこち切ってしまいました。草で切ると、とてもいいです。先生は山へおのぼりになったことがありますか。

五・六日たって、先生からごへんじのはがきが来ました。

「としおくんの手紙はおもしろい。どんなことをやったり、見たりしているかが、よくわかる。そして、山の生かつたのしさが、はつきりあらわれている。先生も、山へのぼったことがある。としおくんの手紙を見て、また山へ行きたくなった。二学期になったら、山のおもしろい話をたくさん聞かせてください。」

と、書いてありました。そしていちばんおしまいには、

「手紙を書く時は、じゅんじよをよく考えることに気をつけましよう。」と、書いてありました。

○ みなさんなら、としおくんの手紙をどうなおしますか。

六 三びきのあり

……先生のお話……

川のほとりに、一本の大きなくなるみの木が立っていました。その下に、ありがすを作りました。どちらを見まわしても、ひろびろとしたはたけでありましたので、ありにとつては、大きな国であつたにちがいありません、

ありには、ある年、たくさんな子どもが生まれました。そのありの子どもたちは、だんだんあたりを遊びまわるようになりしました。すると、あるとき、子ありのおかあさんは、子どもらにむかつていいました。

「おまえたちは、あのくるみの木にのぼつてもいいが、けつして赤くなつた葉につかまつてはなりません。今は、どの葉を見ても、まっさおです。やがて秋になると、あの葉がみんなきれいに色がつきます。そうになると、あぶないから、けつして葉の上にとまつてはなりませんよ。」

と、おしえたのでありました。

ある日のこと、五びきの子ありが、外で遊んでいて、大きなくなるみの木を見上げていました。

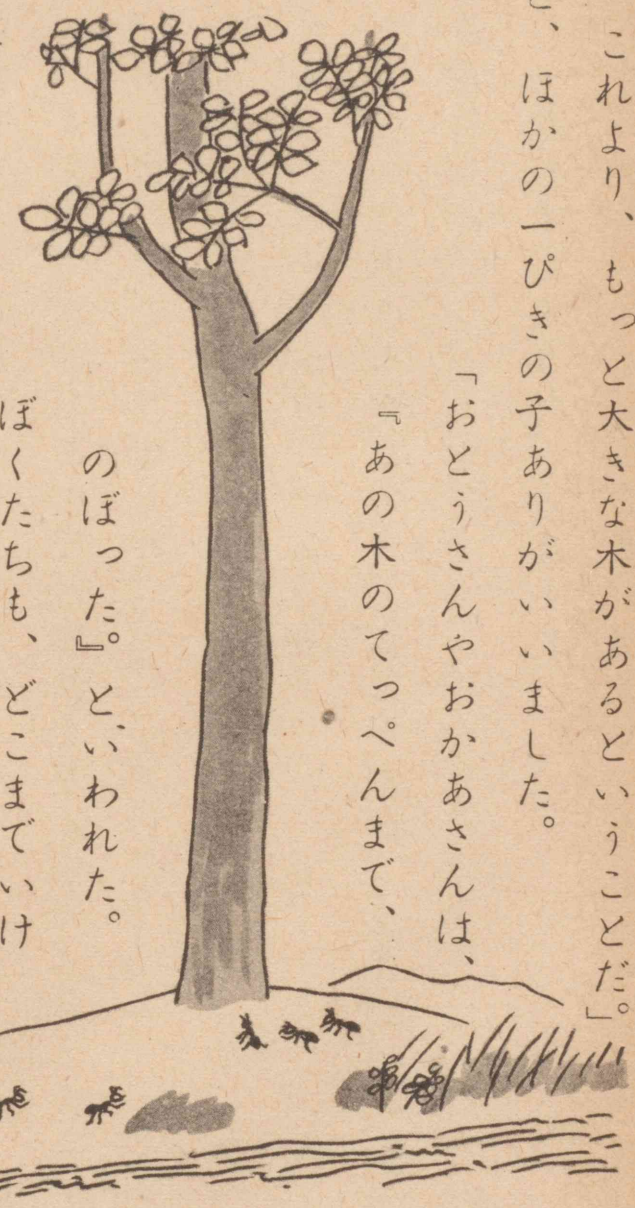
「なんという大きな木だろう。こんな木が、またとほかにあるだろうか。」

と、一びきの子ありがいいました。

「まだ、世界には、こんな木がたくさんあるということだ。」

これより、もっと大きな木があるということだ。」
と、ほかの一ぴきの子ありがいました。

「おとうさんやおかあさんは、
『あの木のとっぺんまで、



のぼった。』といわれた。

ぼくたちも、どこまでいけ

るか、のぼってみようじゃないか。」

と、ほかの一ぴきの子ありがいました。ついに、

五ひきの子ありは、大きくなるみの木にのぼっていきま
した。とちゅうまでいった時分には、五ひきともつかれてしま
って、しばらくえだの上に休んで、ものめずらしそうにあたり
のけしきをながめていました。

「なんとという大きな川だろうか。」

と、いって、一ぴきのありは下を見おろしていました。

「なんとという広い野原だろう。」

と、ほかの一ぴきがおどろいていました。太陽は、ちよ
うど、木のとっぺんにかがやいていました。

すると、その時、

「あのえだに、あんなきれいな葉があるじゃないか。あのそ

ばまでいってみよう。」

と、一ぴきのありがさけびました。一ぴきのありは、

「あの赤い葉がきけんだと、おかあさんや、おとうさんが、

いわれたのだから、いくのはよした方がいい。」

と、いいました。

けれども、ほかの三びきのありは、どうしてもいってみる
と、いいはりました。

二ひきの子ありは、そこから、三びきの子ありにわかれて、
地の上へ帰ることになりました。そこには、なつかしい、お
かあさんや、おとうさんが待っていました。

そして、三びきの子ありは、赤いうつくしい葉をめざして

のぼっていきました。

三十分とたたないうちです。さつと風がふくと、今までの
うつくしい赤い葉は、ポタリとえだからはなれて、ひらひら
とまいながら、下の川の中におちてしまいました。いうまで
もなく、その赤い葉の上には、三びきの子ありがとまってい
たのでした。

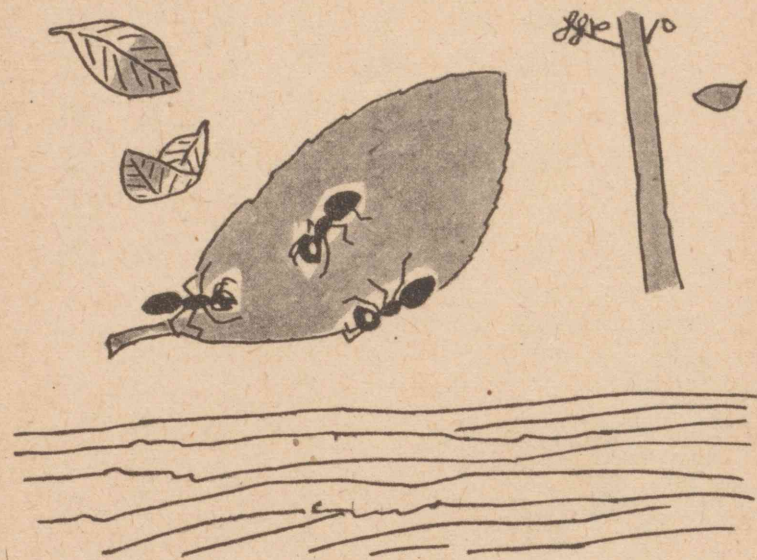
三びきのありは、あまり不意なことにびっくりしましたが、
気がついたときには、赤い葉の上につて、川の上を流れて
いたので。三びきのありは、今はじめて、おかあさんが、
『赤い葉の上につてはいけない。』と、いわれたことをさと
りました。けれども、どうすることもできませんでした。

「さあ、どうなることだろう。」

と、三びきのありは心ぼそくなって、しあんをしまいました。はてしなく、川の水は日にかがやいて、野原の中を流れていました。どこへいくどのようなことなどが、小さなありに、どうして考えがつかましよう。三びきのありは、一つところにかたまつて、ふるえています。

そのうちに、また風がふいて、赤い葉はきしにつきました。三びきのありは、やっと、そこからはいあがつて、あやうくいのがたすかったのです。

そこは、思ったよりいいところでした。きれいな草のはえているおかもありました。三びきのありは、その日から、は



じめて知らない土地に、すを作ってはたらいたのです。いく日かたつと、このあたりの土地にも、いくぶんかなれてきました。それにつけても、三びきのありは、父母の住んでいるふるさとをこいしく思ったのです。けれども、いくら思っても、帰ることはできませんでした。

三びきのありは、いつか、

みんながおとうさんになりました。そして、子どももたくさん生まれました。

けれども、ありは、子どもらにむかって、「木にのぼっても、けつして赤い葉にとまってはいけませんよ。」と、いいました。やはり、むかし、おとうさんやおかあさんがじぶんたちをいましめたように……。

それは、いくらこうふくになっても、おとうさんやおかあさんに、会えないことは、何よりもふこうだったからであります。

○ おもしろいお話をおぼえて、お話をしてみましよう。



新しく出たことば

- あかるく
- あきない(て)
- あきら(くん)
- あきれて(あきれる)
- あじ
- 頭でっかち
- あたり
- アフリカ
- あやうく
- あらって(あらう)
- あり
- あれち
- あわてて(あわてる)
- あんない
- いさましい
- いじよう
- いそ
- 急いで(急ぐ)

14 27 57 76 10 16 97 100 36 106 76 27 42 89 63 13 84 27

- いたい
- いただいた(いただく)
- 一度
- 一ろう(さん)
- いっしょうけんめい
- いったい
- いと
- いとこ
- いましめた(いましめる)
- ういて(うく)
- 動く
- うけもち
- うつくしい
- うまれて(うまれる)
- 産む
- えらんで(えらぶ)
- おおせい
- 小川

37 57 94 10 84 66 11 24 24 108 98 23 66 49 87 14 11 31

- おこづかい
- おしいれ
- おしつけました(おしつける)
- おどきのくに
- おどったり(おどる)
- おの
- おべんどう
- おぼえて(おぼえる)
- おまえたち
- おもい
- おり
- 終り
- かえった(かえる)
- かがやいて(かがやく)
- かかりました(かかる)
- かくれて(かくれる)
- かげえ
- かざらう(かざる)

6 56 91 86 106 42 37 43 72 87 19 37 11 83 74 27 58 59

ざらざら さわきたてる
 しあん 時こく
 しっかり 知って(知る)
 じつと じぶんたち
 しゃも じゃんけん
 (からだ) じゅう
 じりじり しらはま
 しろう じろう
 しるし
 すうつと
 すきとおって(すきとおる)
 すき(な)
 すぎました(すぎる)

31 13 106 21 41 85 43 108 33 71 92 24 19 70 58 18 34 34 94 65

31 すくって(すくう)
 13 すごく(すごい)
 106 すじ
 21 すし
 41 すっぱい
 85 すてた(すてる)
 43 すな
 108 すばこ
 33 すんだら(すむ)
 71 住んで(住む)
 92 センチ(メートル)
 24 せんこう花火
 19 せんぶ
 70 そちら
 58 それで(それる)
 18 大事(な)
 34 だいじょうぶ
 34 だいどころ
 94 大すき(よ)
 65 だいなし

90 49 18 40 89 44 31 14 12 86 45 90 47 12 51 63 17 88 10 54

90 たがめ
 49 たすかります(たすかる)
 18 ただいま
 40 たつ
 89 たび(に)
 44 たま
 31 たまりません
 14 たみ子(さん)
 12 たらたら
 86 だれか
 45 たらう(くん)
 90 ちがった(ちがう)
 47 ちず
 12 ちよ金
 51 ちよ子
 63 チョコレート
 17 ちよつと
 88 ついに
 10 つかれない(つかれる)
 54 つぎつぎ

91 38 19 107 43 49 26 87 85 7 71 76 20 59 70 59 18 102 59 60

かしら
 かず
 かず子
 かたい
 形
 かね
 かぶって(かぶる)
 かべ
 かばかばかば
 かま
 からかい(からかう)
 カラスまど
 からみあつて(からみあう)
 からり(と)
 かわいそう
 代わって(代わる)
 かんしん
 キロメートル
 気がついた(気がつく)
 切って(切る)

16 12 24 47 91 8 25 12 83 91 27 30 64 48 62 77 59 85 105 98

16 きつと
 12 きのとく
 24 きまりどおり
 47 木村先生
 91 気もち
 8 キャッチボール
 25 急に
 12 きようそう
 83 きれま
 91 気をつけて(気をつける)
 30 ぐうぐう
 64 くずれた(くずれる)
 48 くぎり
 62 くつしより
 77 くもつて(くもる)
 59 くらして(くらす)
 85 くるみの木
 105 けっして
 98 校長先生

16 79 79 11 51 16 27 46 24 54 67 35 39 89 22 61 100 101 61 10 10

16 ここ(だよーつ)
 79 心ほそく(心ほそい)
 79 こぞう
 11 ごぞんじ
 51 こたえました(こたえる)
 16 ごちそう
 27 ゴトゴト
 46 ゴトン
 24 ゴトンゴトン
 54 ごへんじ
 67 ごほうび
 35 コボンコボン
 39 小山
 89 これ(て)
 22 さかのぼる
 61 さかん(に)
 100 ザザザ ザザン
 101 サツ(と)
 61 さとうやす子
 10 さとりました(さどる)

5 106 68 19 9 9 53 47 52 26 99 59 23 92 17 34 46 29 105 9 105

ひょう本
ひょう
ひらひら
ひろがって(ひろがる)
ひろし(くん)
びんぼう
ふう(に)
ふうん(と)
ふきました(ふきます)
ふくろ
ふじ
ふしぎそう
ぶつ
フライパン
ブランコ
ふり向く
ふるさと
プレーボール
ふるしきづつみ
へいき

72 40 49 107 93 7 15 54 28 73 63 86 27 10 61 25 35 105 12 25

へん(だ)
ぼうつ(と)
ほえて(ほえる)
ぼくたち
ポケット
ほこり
ポスト
細く
ポタリ(と)
ほどり
ほんの
まいながら(まう)
まがって(まがる)
まけた(まける)
まさお(くん)
まさる
また(と)
まで(まつ)
まど
まぶし

45 5 68 101 70 22 71 92 105 16 100 105 92 59 95 14 102 86 23 14

まめ
守ろう(守る)
まゆ
まるで
見上げながら(見上げる)
見送って(見送る)
右がわ
みずかまきり
みずすまし
見つけて(見つける)
みどり
見とれて(見とれる)
見まわしても(見まわす)
向きました(向く)
むやみ
めずらしい
めちやめちや
もうじゆうがり
もつと
もどどおり

35 31 76 53 63 59 9 100 93 92 37 90 91 86 41 64 97 46 21 63

つきます(つく)
つたわって(つたわる)
つつじ
つぶれかけた(つぶれかける)
つまずく
つまらなそう(つまらない)
つゆ
つらない(つる)
つるつ(と)
出て(る)
でんしん柱
どうぐ
どうした(どうする)
どうたい
どうも
どう話
どきつ(と)
土地
とちゆう
とばし

86 26 107 50 96 41 71 16 61 26 31 16 87 89 14 79 12 52 68 101

とびこむ
とびつきます(とびつく)
とりがえつこ(とりがえる)
とりごや
どろだらけ
とんだ(こと)
なおしますか(なおす)
ながされる
ながめた(ながめる)
なれない(なれる)
なんでも
にた(にる)
日曜日
にわそうじ
ぬけ出よう(ぬけ出る)
ねもと
野きく
のこった(のこる)
のびて(のびる)
のぼる

35 64 47 97 69 44 13 13 97 10 38 94 32 99 63 38 13 63 37 35

葉
ばあつ(と)
はいあがつて(はいあがる)
はいどうどう
はがき
はしご
はしやぎ(はしやく)
はずれました(はずれる)
パチパチ
はてしなく
はなれて(はなれる)
はね
はばたき(はばたく)
はま子
はら
バラバラ
晴れた(晴れる)
はれま
ひと休み
ひばり

32 65 32 48 23 34 70 14 14 105 106 9 50 27 64 99 73 16 27 43

教師のページ

子供の生活経験と興味とをもとにして、六つの題目をとりあげた。それに、話す、聞く、読む、書くという国語のはたらきを組み合わせることによって、この本が構成されている。

一、三年生になつて

三年生になつた時の姿は、二年生になつた時のように、はじめて進級した喜びだけのものではない。おたがいに喜びあい、反省もし、希望も持つ。またそれにふさわしい考え方や行動が伴ってくる。

(一) あかるい教室

〇はじめの詩。新学年はじめての登校の日は、だれでも心がおどる。教室・机・座席のこと、先生や友だちのことなど、どれも子供の心をゆすぶる。ここから詩もうまれ、詩の指導も出発も導き出される。

〇六・七頁の対話。ごく自然なふたりの子供の対話である。

会話だけの文として、話しあい、話し方教育の一つの姿である。ことばのやりとりや、ことばと行動の関連などについて注意されたい。

(二) 新しい友だち

新しい友だちはだれにも印象深いものだ。新しい友だちにどうしてあげたらいいだろうか。どんなに話しあつたらいいだろうか。こうした中に生きた国語教育の場がある。

前の学校の先生に手紙を書くのもごく自然である。このような手紙文の必要性が、実際の国語教育へのこのまじいきっかけとなってくる。

(三) つぶれかけたたまご

この話は上野和子作「つぶれた卵」にヒントを得たものである。(一)と(二)は学校生活での三年生の姿であつたが、これは家庭生活での三年生らしさである。だんだんひろがる生活への一つの態度を示している。全体として明かるいユーモアを含んでいる。作文の指導にも適当であると思う。

二 春の遠足

(一) おしらせ

遠足は得がたい学習である。だから、学校でいろいろ計画したり準備したりするとともに、家庭でも十分関心を持つようにさせたい。そういう営みの中に、きわめて自然な話しあいもなされ、生活態度も作られていく。教師も家庭に対してこうした意図を持っていただきたい。

(二) みんなできめたやくそく

遠足ほど楽しみなものはない。しかし、まだ遊山気分も少なくない。遠足のようなものも、もっと、教育計画の中ではつきりした位置を占めなければならない。これは国語の場合ばかりではない。

(三) しらはまへ

朝、電車の中、海の三つのがった表現形式で、簡単に遠足の日をあらわしている。三年生の子供はだらだらと文章をそれから、それからと書きつ

づつていく。しかし、それが特長なので、それを一足どびに簡潔なものにひびいていくことはできない。

(四) あくる日

遠足のあくる日には、数多くの仕事が残っている。ここでは、特に紙しばいを作ることである。紙しばいは、絵よりも文の方がむづかしい。一般に長すぎるのである。

四の場面の宝島は、スチアンソンの宝島をいつている。おりがあつたら、ロビンソン・クルーソーや宝島の話の一部を話してやつてもらいたい。

三 つゆのはれま

(一) はれま

どれも子供の作品であるが、その技巧にそぼくな感覚のひらめきが見える。はれまにとび出す子供たちには、見なれたものにも新鮮さを感じる。このへんで作詩の指導をしたい。題材は動物だけでなく、もっと身近な生活にも目を向けさせたい。

(二) 田うえ

朝から晩まで忙しい田うえ。しかし、その中にも楽しみと心安さがある農村の姿をえがいたものである。手伝ったり手伝われたりする農村の生態にもだんだん目を向けさせたい。

全体の構成が、朝、昼、晩の三部作になっている。この点作文の指導に示唆を与えてくれる。

(三) かいこの日記

児童作、二年生の上巻の「おたまじやくし」の観察日記にくらべると、その態度にも記述にもかなりのひらきがある。数匹のかいこの飼育であるから、農村の実際のようにすはあらわれないが、毎日くわしく観察するにはむしろこの方が都合がよいだろう。

(四) はらっぱで

ひさしぶりのはれまに、子供たちはみんな外へどび出す。はらっぱで野球がはじまる。三年生では、まだ野球はなかなかうまうまできない。中でも審判はむずかしい。しかし、むずかしいながらも、

のいろいろの面が一つにまとまって、楽しい中に訓練され身についていく。

(二) わらい話

子供たちはわらい話をこのむ。けれども、日本人は、生活の中にこうした面を見いだすのはあまりうまくない。

この四つのわらい話は、どれも子供たちの日常生活近なことから、理解もむりではない。もつとほかのわらい話も集めたり話させたりして、おもしろさをわからせたい。

(三) ジャックとまめの木

よく知られた話であるが、前半を物語りとし、後半は、この話のやまをかげえしはいとした構成に留意されたい。紙しばいと比較して、その特色や製作や取扱について話しあいをさせ、実演させたい。この話を、全部物語りとして読ませたり聞かせたりすることも必要である。

(四) おうま遊び(げき) (齋田 喬作)

みんなて話しあつて、スポーツを楽しむどころに生活を充実する意味がある。ただ勝てばいいという今までの姿から飛躍させなければならぬ。本文でもそうしたフェアプレーを強調している。本文中の外国語については一応まとめ、野球用語については一応まとめ、野球用語についても話したいをさせる必要がある。

後半の庭へどびこんだボールの部分は、柳井良子作によつたものであるが、ユーモアがあるとともに、ことばの訓練やことばへの関心を持たせる点に興味がある。この外にいろいろの場面を考えさせるとおもしろい。

(一) はじめのことば

みんなの前で話したりあいさつしたりすることは、だんだん必要に迫られてくる。短くても要点をはつきりいあらわせるようにしたいものである。この「はじめのことば」もきわめて短い。しかし、その中に含まれている要項はいくつもある。こいつふ意味からも、学芸会のような催しは、国語教育にとつてまことに好ましい場である。国語

人数からも内容からも三年生にふさわしい。楽しい遊びの中にじろろの健康な生活態度が明らかくえがかれている。文を通してそれぞれの子供の心情を話しあひさせたい。

子供の自然の遊びの中には大い歌がはいっている。その意味でこの劇にも歌がくりかえし出てくるのはおもしろい。それにこの歌は内容的にも重要性を持つている。

五 夏休み

(二) 山の村へ

楽しい夏休み、一月余りの子供の生活、子供たちの生活は、質の上からも量の上からも変わってくる。旅行などすると、珍しい風物におもしろさを感じるとともに、その地方のことばへの興味もわいてくる。

(二) としおくんの日記

おりを見ては日記を書くことを教えた。三年生ごろになったら、絵よりも文の多い日記になつてもいい。ただ農村の美しい自然だけでなく、魚

1944
1007

広島大学図書

0130449809 09



50
809